

音楽科研究主題

「よりよい音楽表現をするための言語活動とその評価」

音楽科 鏡 千佳子

1. テーマ設定の理由

本校では平成21年度より新学習指導要領に関する研究を行い、初年度は習得・活用を意図した学習活動や生徒とのかかわりについて実践研究を行った。音楽科では、音楽の授業がその時だけのものではなく、習得したものを一年後、二年後、さらには生涯にわたって活用できるような学習活動の研究を行ってきた。平成22年度から言語活動にも着目し、言語環境・言語活動の充実を意図した学習活動にも取り組んできた。歌唱や鑑賞の授業で、できるだけ言語活動を取り入れたが、果たして生徒にどれだけ自分の思いや考えを表現する力がついてきたのだろうか。ただ無秩序に言語活動を行ったり、必要以上の話し合いをさせてはいなかったのだろうか。授業がただの話し合いにならないために、音楽科としての言語活動とはどのような活動が理想的なのかということを探した。

音楽の授業を通して、生徒にどのような力をつけさせたいか考え直してみた。新学習指導要領の音楽科の目標に「音楽を愛好する心情を育てる」「音楽に対する感性を豊かにする」「音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」とある。生涯にわたって音楽を愛好するためには、一人で好きな音楽を聴いたり表現するだけでなく、音楽活動によって生まれる喜びや楽しさを友達と共有したり、音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取りながらそれを表現するといった活動を設定していくことが必要である。人は音楽によって自分の心情をどのように表現してきたか、人と人とがどのように感情を伝え合い共有し合ってきたか、などについて生徒自身が実感できれば、自分たちの音楽表現もよりよいものになっていく。そこで、本校の研究テーマである「指導と評価の一体化」を目指して一言語活動に着目した学習活動の評価のあり方を受けて、音楽科としての言語活動の方向性を研究すべく、「よりよい音楽表現をするための言語活動とその評価」というテーマに設定した。言語活動を充実させるのではなく、生徒自身の音楽表現を充実させるために有効な言語活動を取り入れた授業を考えていくことが大切である。そして、そのような授業で生徒に自分の思いや考えを相手に伝える力がついたのかを評価できる場を設定し、さらに充実した姿を目指せるように指導に生かしていくことで指導と評価の一体化を図っていきたい。

2. 音楽科における言語活動について

よりよい音楽表現をするための創意工夫をグループで行い、その内容を発表するといった1年生のアルトリコーダーでの授業実践では、既習したことを出し合い、自分たちで強弱や速さなどを工夫し話し合う姿が見られた。その際、楽譜に音楽用語を用いて記述する生徒もいれば、言葉で直接書き込む生徒も見られた。夏休み前には「アツピア街道の松」という鑑賞曲で強弱記号を既習しているにもかかわらず全員が記号を用いて記入できなかったのは指導が行き届いていない現れである。この鑑賞曲は、遠く離れた所からゆっくりと軍隊が近づいてくる様子を表現した曲で、pppから軍隊の行進に伴い徐々に音の強さを増し、fffに至るまでの変化がわかりやすく、生徒が強弱の変化を感じ取りやすい

曲である。強弱の働きによって曲想の変化を感じ取ることはできていたのだが、p や mp, f など記号としての意識付けが弱かった。この授業でのワークシートでは、生徒のほとんどが強弱記号を使って曲の紹介文を書いたが、アルトリコーダーの授業ではそれらをうまく活用できなかったということになる。しかし、強弱記号を理解していないかというところではなく、創意工夫の話し合いをする際に「音楽用語を用いて」と一言付け加えれば生徒全員が書けたのではないかと思われる。教師側の働きかけ一つで生徒の音楽用語への意識が変わってくるのだと実感した。生徒の姿から、授業中の言葉かけなども改めて考えさせられ、よりよい授業に向けて改善が必要だと感じた。

よりよい音楽表現をするためには自分が感じた音や音楽の良さや美しさ、思いや意図を十分に伝える力が必要であり、その力を育成するためにも学習の過程で言語活動を適切に取り入れることが必要である。生徒が冷静に自己のイメージや思いを伝え合い、根拠に基づいた話し合いや批評ができるようになるには、無秩序な言語活動や必要以上の話し合いを避け、充実した言語活動を行える環境、活動を設定する必要がある。生徒が言語活動を繰り返し行うことで、自分の思いを多様に表現できるようになり、豊かに音楽表現をしたり、鑑賞を深めたりすることにつながっていく。そのためには、根拠の持ち方の指導、また音楽の諸要素や音楽上の知識や技術を拠り所にした指導や説明も大切になってくる。

3. 言語活動の場面、形式

音楽科では、歌唱、器楽、創作、鑑賞、全ての活動における言語活動が可能であるが、平成23年度の研究では主に創作と鑑賞の活動での言語活動に取り組んだ。1年生の創作では5人ずつのグループを作り、題名に沿うようなリズム創作を工夫した。「雪合戦」や「台風」「嵐」「工事現場」「トトロ」など、自分たちで題名を考え、各グループで話し合いを重ね、各々のイメージをリズム化していき、強弱、速度なども工夫した。前期の鑑賞の授業で強弱記号を学習していたことから、それらを用いて楽譜に記入するように説明し、音楽用語を使って表現できるように心がけた。アルトリコーダーアンサンブルでは、男女混合のグループで実践したが、思うように話が進まなかった反省から、今回は男女それぞれで5人ずつのグループを作り実践した。最初はリズムだけで表現するという初めての試みに苦戦している様子で、例に示したリズムを組み合わせて作っているグループが多かったが、徐々に話し合いが盛り上がってくると自分たちオリジナルのリズムを作り上げていく姿が見られた。

2年生のアルトリコーダーアンサンブルでは、「エーデルワイス」「春」「星の世界」の3曲から演奏したい曲を選び、その中で2～5人ずつのグループを作り、自分たちで強弱や速度、奏法など、曲想に合った工夫をした。それぞれが曲に対するイメージを話し合い、楽譜に音楽記号や音楽用語を用いて記入し、演奏するという自分たちならではの曲作りに意欲を見せて取り組む姿が見られた。

創作での言語活動ではお互いの思いや意図を伝え合って曲作りに反映させ、それを発表することで多様な考えをクラスで共有することができたが、鑑賞での言語活動ではそれぞれ自分が感じたことをお互いに伝えあうという場面を設定できなかった。そのため、考えが深まらなかったり、思いをうまく言葉で表現することができない生徒もいた。それらの反省から、鑑賞での言語活動でも思いや考えを伝える場面を設定し、多様な考えも聞きながら、最終的に自分の思いを言葉で表現させる活動が必要であると感じた。

4. 言語活動を取り入れた学習活動の評価について

音楽科の評価の観点は〔音楽への関心・意欲・態度〕〔音楽表現の創意工夫〕〔音楽表現の技能〕〔鑑賞の能力〕の4つの観点である。今年度言語活動に着目した評価として取り組んできたものは、表現領域では〔音楽表現の創意工夫〕，鑑賞領域では〔鑑賞の能力〕の2つの観点である。

中学校音楽 評価と観点

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
音楽に親しみ、音や音楽に対する関心を持ち、主体的に音楽表現や鑑賞の学習に取り組もうとする。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図をもっている。	創意工夫を生かした音楽表現をするための技能を身に付け、歌唱、器楽、創作で表している。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、解釈したり価値を考えたりして、よさや美しさを味わって聴いている。

音楽科の言語活動の評価としては、元々備わっている国語力とは別に、学習した内容を自分の言葉として相手に伝えられるようになったかということが重要であり、その部分を評価しなければならない。また音楽的な知識を持っている生徒とそうでない生徒とでは内容に関する差が大きくなってしまふこともあるので、あくまでも学習した内容を自分の言葉として相手に伝えられるようになったかということの評価することが大切である。

5. 言語活動を取り入れた学習活動の評価の実際

言語活動を取り入れた活動の評価の実際として、歌詞に込められた思いを表現するための話し合い、アルトリコーダーでの強弱や速度の工夫、リズム創作、鑑賞曲での紹介文・批評文、など各学年、歌唱、器楽、創作、鑑賞、全ての活動において取り組んできた。ここでは1年生の鑑賞教材である「魔王」を例に示してみる。この授業では、シューベルト作曲の「魔王」とライヒャルト作曲の「魔王」を比較して聴き、声の音色、ピアノ伴奏の違いや作曲構成などを比べることで、より「魔王」についての理解を深め、どちらが気に入ったかを根拠を用いて述べるということを目指に行った。

○教材 シューベルト作曲「魔王」、ライヒャルト作曲「魔王」

○指導事項：ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。

イ 音楽の特徴をその背景となる文化・歴史やほかの芸術と関連付けて、鑑賞すること。

○〔共通事項〕 音色、リズム、拍子、旋律、テクスチャ、強弱、構成

○指導の実際（3時間）

時	主な学習活動	評価とその方法
1	・シューベルト作曲の「魔王」を聴き、音色（声）、リズム（ピアノ伴奏）、拍子、旋律、テクスチュア（歌とピアノ伴奏とのかかわり）強弱などを知覚・感受する。	・声の音色・歌とピアノ伴奏とのかかわり・通作歌曲による構成や、構造と曲想とのかかわり、音楽の特徴に関心を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。〔音楽への関心・意欲・態度〕（ワークシート、観察）
2	・ライヒャルト作曲の「魔王」を聴き、音色（声）、リズム（ピアノ伴奏）、拍子、旋律、テクスチュア（歌とピアノ伴奏とのかかわり）強弱などを知覚・感受する。	・声の音色・繰り返される旋律・歌とピアノ伴奏とのかかわり・有節歌曲による構成や、構造と曲想とのかかわり、音楽の特徴に関心を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。〔音楽への関心・意欲・態度〕（ワークシート、観察）
3	・シューベルトとライヒャルトの「魔王」を聴き比べ、どちらが気に入ったかを音楽を形づくっている要素や構造を用いながら <u>言葉で説明する。</u>	・声の音色・繰り返される旋律・歌とピアノ伴奏とのかかわり・通作歌曲と有節歌曲による構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じしながら、音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわり、音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連づけて解釈したり価値を考えたりし、 <u>言葉で説明するなどして音楽のよさや美しさを味わって聴いている。</u> 〔鑑賞の能力〕（ワークシート）

※下線は言語に関する活動を取り入れた部分を表しています。

この授業での評価基準を次のように定めた。

◆評価基準表

十分満足できる状況	概ね満足できる状況	支援
声の音色、繰り返される旋律、歌とピアノ伴奏とのかかわり、通作歌曲と有節歌曲による構成などに触れながら書き、かつ、自分の考えも書いている。	声の音色、繰り返される旋律、歌とピアノ伴奏とのかかわり、通作歌曲と有節歌曲による構成などに触れながら書いている。	どのようなところが気に入ったのかを要素と照らし合わせて確認し、自分なりの考えがもてるようにする。

《シューベルト》がいいと思います。

私が気に入ったのは、前奏や間奏の馬が走る足音の部分が本当に走ってくるようでおもしろいからです。そして、有節歌曲より通作歌曲の方が変化が感じられて、ごんごん魔王がみちびいていることが、より分かるからです。セリフにエ、て歌声を変えるとこれもおもしろいと思いました。

私はシューベルトの曲の方が好きです。なぜなら、まず、全体的にシューベルトの曲はピアノの伴奏や歌の音の強弱、高低がその場合ごとによってさまざまで、一回聴いただけでもおもしろい曲なんだなあ、とすぐ分かるからです。また一番最初の馬の駆ける音「タカタカタカ…」というのが曲の始まりとして曲の調子が一気に上がるような感じだったのでとても気に入り、印象に残りました。それに対してライヒャルトの方は歌詞を聴かないとどんな内容かは推できません。そして、「魔王」という題名ならば、全体的におもしろい感じがするのですがそれがシューベルトの曲にぴったりだったからです。

私は、シューベルトの魔王の方が好きです。理由は、ライヒャルトの魔王は、登場人物に関係なく、声と同じ調子ですが、シューベルトの魔王は、登場人物ごとに、声の調子が変わったり、気持ち(感情)がこもった歌い方なので、背景がわかりやすくおもしろいです。また、シューベルトの魔王は、馬の足音をピアノで表現するなど、ライヒャルトとちがった表現の仕方もおもしろいです。それから、ライヒャルトは、ピアノも歌も音やリズムが同じところが多ければ、シューベルトはピアノと歌両方で背景や登場人物の心情が表され、両方で魔王をイメージできるので、シューベルトの方が好きです。

○十分満足できる状況の例 (ライヒャルト派)

僕はライヒャルトが作曲したのが好きです。理由は流れるようなリズムで歌っていて、同じ旋律がくり返し使われているからです。シューベルトは強弱がはっきりしていて役がかわるにつれて声の音色もかわっていていいけど、少しうるさいのでライヒャルトの方が好きです。また、3拍子というところもワルツみたいで好きです。同じ歌詞でも曲の感じが全然違ってびっくりしました。

私はライヒャルトの方が好きだ。有節歌曲のほうが、次にどんな音が出るのか予想でき、歌にのるこたができたからである。もちろん、シューベルトの方の冒頭部分は、とても強烈な印象が残るが、ライヒャルトの一定の旋律も、ずっと頭に残っている。また、3拍子だったこともあり、リズムにのるこたもできた。

ライヒャルトの方が「リズム感」がよく好きだ。同じ音のくり返しは「魔王」の所だけピアノの旋律を弾いていて低い声になっていて強弱のちがいはあんまりわかんないけどそういう所で開きわけられてこっちの方がオモシロい。シューベルトの方はゆっくりすぎるので「明るくスムーズ」に進んでいくライヒャルトの方が「イイ」

十分満足できる状況としては、自分が気に入った理由を「魔王」を形づくっている要素（声の音色、繰り返される旋律、歌とピアノ伴奏とのかかわり、通作歌曲と有節歌曲による構成など）に触れながら書き、かつ、自分の考えも書いているものとした。シューベルト派が圧倒的に多かったが、どちらにしても音楽の諸要素から感じられる雰囲気や思いなどをうまく言葉で説明することができていた。

概ね満足できる状況として、「魔王」を形づくっている要素（同上）に触れながら書いているものとしたが、それだけを書いている生徒はほとんどおらず、要素から感じ取れる自分の考えも書いている生徒がほとんどであった。

○支援の状況の例

① シューベルト

シューベルトの曲の方がとても暗い感じがして、
歌詞がタイトルと合っていて好きだ。

② 僕はシューベルトのほろが気に入っています。

理由はシューベルトは気持ちが入っているので場面を想像しやすい
かいていておもしろいからです。

どちらも「魔王」を形づくっている要素（声の音色、繰り返される旋律、歌とピアノ伴奏とのかかわり、通作歌曲と有節歌曲による構成など）に触れていないので、概ね満足できる状況とは言い難い。

①の生徒はどんな要素から暗いと感じたのか、という理由を要素を説明しながら引き出す必要があると感じた。また、歌詞がタイトルと合っているというのは、ライヒャルトにも言えることである。おそらく歌い方（声の音色）が「魔王」らしいということを書いたかっただろうと推測される。

②の生徒も、気持ちが入っているので場面を想像しやすい、という表現をしているが、こう感じる元となった要素は何なのかという部分が足りない。これも歌い方（声の音色）のことを書いたかっただけと思われる。このように、自分の気に入っている理由をうまく要素と結びつけて表現することができない生徒が各クラス1～2割ほどいた。これらのことから、支援を要する生徒に対して、諸要素を再確認するとともに、自分が感じた思いや考えはどの要素から感じ取れたのかを一緒に考えていく必要があると感じた。

○評価に困る例

シューベルト

シューベルトの方は、4人の登場人物を1人で演じている
し、音低がばらばらでわかりやすい。

この生徒は「音低」という言葉を使って説明しようとしているが、おそらく「音程」のことだと思われる。音程がばらばらでわかりやすい、と一見要素を使って表現しているかと思われるのだが、言葉が足りない分、どの部分の説明なのか、また、どういうことを言いたいのかかわからない。要素に触れながら書いているという概ね満足できる状況に評価するには難しい状況かと思われる。

もう一つ評価に困る文として、音楽の要素とは違った視点で「魔王」を捉えている生徒の例がある。この生徒はしっかりと自分の意見を持ち、どちらが気に入ったかという理由も自分の言葉で書いているのだが、ライヒャルトの「魔王」が好きな理由として「あまりにできすぎた劇（ミュージカル）よ

りらおもしろい絵本を読み聞かされている方が楽しいから」という書き方をしていた。書いている文の量は十分満足できる状況の例と同じくらい書いているのだが、要素に触れながら書いておらず、曲のどんなところからどう感じて、だから気に入ったという理由がわからない。概ね満足できる状況の評価基準には当てはまらないと思われる。しかし、この生徒のように、音楽を聴いて理屈ぬきで好きだ、感覚的に好きだ、という部分が必ずある。今回の授業実践では根拠を明確にして説明できる力を評価したが、音楽科の目標でもある「音楽を愛好する心情」を育むためにも理屈ぬきで好きだ、感覚的に好きだ、という部分も大切にしたい。

6. 成果と今後の課題

今回の授業を通して、音楽を自分の言葉で表現するには、表現するための用語を知った上で更にその用語と自分が感じたことがどう結びついているのかということが理解できないとうまく表現できないということがわかった。普段から音楽室には要素を掲示してあるのだが、あなたの意見はこの要素から感じ取れたんだね、とか、これはこの要素のことだね、などと要素を意識した授業を心がけていく必要があると感じた。

「4. 言語活動を取り入れた学習活動の評価について」において書いたとおり、音楽科の言語活動の評価としては、元々備わっている国語力とは別に、学習した内容を自分の言葉として相手に伝えられるようになったかということが重要であり、その部分を評価しなければならない。しかし、支援の状況と評価に困る状況の生徒は概ね満足できる状況の生徒に比べて書いている量が少ないことが今回の授業でわかった。自分が感じたことや思いを言葉で表現するにはある程度の国語力が必要なのではないかと感じた。ただ、物語や小説のように書く力や作文力を要するのではなく、あくまでも授業で習った用語を用いて、自分の感じたことや思いを表現できる力を音楽の授業を通して育てていく必要があり、そのためにも、積極的に意見を述べ合える雰囲気づくりや参考になる生徒の文章や書き方を授業中にフィードバックするなどの指導の工夫が必要であると感じた。

音楽から感じ取ったこと全てを言葉で表現するということは完全にはできない。しかし、自分が感じたことは音楽の諸要素のどれと結びついているのかを整理していくことで、音楽の聴き方も変わっていく。2年次3年次と諸要素を通して鑑賞の授業を進めていくとともに、様々な音楽の聴き方を見いだしていけるような生徒を育てていきたい。また、聴き方を深め、思いや考えを表現するための方法を学ぶことで、歌唱や創作で自分たちが作り出す音楽もよりよいものを目指すことにつながる。そのときに自分の感情や思いを相手にうまく伝え、共有しあえるようにこれからも生徒自身の音楽表現がよりよいものになるように有効な言語活動を取り入れた授業を工夫していきたい。